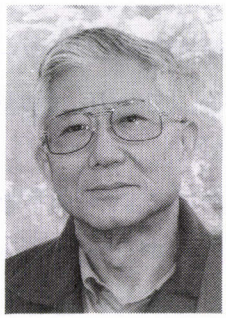

巻頭言：ＩＧＳのＩ「国際性」についての所感

ＩＧＳ理事　赤　木　俊　允

本誌で詳しく報告されているように、本年３月末米国アトランタ市において第６回ジオシンセティックス国際会議が開催された。世界中から1900名近くの参加者があり、大成功を納めたと報じられている。これに関連し彼の地で、「国際性」ということについて感じたことを、２，３述べてみることにしたい。

国際会議は、最新の知見と経験を交換するのが主目的であるから、まずコミュニケーションが成り立つことが重要である。また「交換する」が前提であるから、ギブ・アンド・テイクが原則である。コミュニケーションについては、英語が公用語と定められている場合が圧倒的に多く、英語を母国語とする者には断然有利な環境となる。最新の知見と経験を英語で提供し、英語で聴取しなければならないことは、特に我々日本人にとってはまことに不利で不便なことと言わなければならない。しかし残念ながら、それが国際的なつき合いの前提条件になってしまったようである。

国際ジオシンセティックス学会の一支部として、国際的な活動をするとはどういうことなのであろうか。やはり上記のように、ジオシンセティックスに関する知見と経験を国際的に交換し合い、互いに切磋琢磨するというのが主目的、ということになろう。それはまた、一般的には英語という手段を用いてでなければ果たせない。通訳を雇えばよいではないか、とは言えるものの、現在のところそれは貧乏学会が依存できる解決策ではない。英語で発表をしたり、ディスカッションをしたりできる個人用の自動翻訳システムが、近い未来に低料金で利用できる見通しは未だない。実際国際会議に出席する毎に、言葉の壁が依然深刻であることを痛感せざるを得ない。我々は、この問題をもっと真面目に直視すべきではなかろうか。

外国語はスポーツである、というのが長年の間英語に悩まされてきた私の持論である。たゆまぬ練習と実戦の経験とがモノを言う実技だからである。 また少々歳をとってもゴルフと同じで、日頃の心がけ次第では、若い人にそうひどく後れをとることもない。いい格好をしようなどとはつゆ思わず、できるだけ童心に戻ってひたすら繰り返しの稽古に励み、「分かればいいじゃないか、通じればいいじゃないか」というボギーペースの英語を目標にがんばる。ブロークンでも何でも主張すべきは主張し、分からなければとことん食い下がる、といったしぶとさとハングリー精神が、どうも最近の大和民族には欠けているのではないか。とまで言うと、老人の繰り言は嫌みだね、と会員諸兄からは顰蹙を買う。

完璧をねらうのは愚かであるが、練習もしないで上手くなれるようなスポーツはないように、うんと汗をかき恥をかくのでなければ、ボギーペースの英語といえども望み薄となろう。私の唱えるボギーペースは、国際語として何とか役に立つレベルの手段である。ヘボゴルフとヘボ英語は実に共通点が多く、共にその程度で結構底の深い、実益をもたらす趣味となる。外国語の勉強

は、それを母国語とする人達のものの考え方と感性を探ることでもある。言葉が思考のパターンと人格を形成するのであり、その理解がコミュニケーションをスムーズにする。外国語の勉強は、人生の地平線を拡げ人生をより豊かにするものであることも強調しておきたい。

国際語としての英語はコミュニケーションの手段であり、それ以上のものではないと割り切って取り組むべきであろう。勿論、研鑽を重ねてそれをシングルのレベルに高め、更に才能と機会に恵まれた人はこれをプロの領域に発展させることに異論のあるわけはない。しかし、コミュニケーションは、両者の意志の疎通をはかり、両者の間に人間としての共感を構築しようとする意欲がなければ、知識や情報の伝達も上手くゆかないものである。従ってこの手段を操る人の人間としての実力と魅力とが、コミュニケーションの最も重要な要素となる。そのような意味で、国際学会や会議のお祭り的な催しは正当化できようし、人間同士のつき合いを深めるために最大限利用すべきものでもあろう。

国際的とは、無国籍的ということではない。まず日本人として固有のものを持ち、人間として独特な個性を持つ人が、それとは大きく異なるバックグラウンドを持つ異国人と分かり合う場を作ることを意味する、と私は思っている。相手が自分にはない独特なものを持っているから、分かろうと努力する甲斐がある、というものである。いわばそれが国際会議の趣旨であり、国際学会を形成する目的と云えるのではなかろうか。

ジオシンセティックスには直接関係のない話になってしまったが、ＩＧＳに対する我が日本支部の貢献は高く評価されている。ＩＧＳ創設以来の理事としてその発展に大きく寄与された福岡前支部長のご尽力を始め、1994年には龍岡・垂水・村田・舘山会員が、また今回三木会員がそれぞれＩＧＳ賞を受賞されたこと、また個人会員約200名、法人会員20社前後を擁してきたことは、我が支部が国際的な役割を十分に果たしていることを物語っている。しかし、苦言がないわけではない。例えば、国際会議と共に開催される展示会への参加が、我が国からは近年ほぼ途絶えていることである。４年前のシンガポール会議の時には、アジア地域での開催であり度重なる組織委からの請願があったにも拘わらず、出展した56社の内、日本からは僅かに２社であった。アトランタ会議では119社の出展があって盛況を呈したが、遂に日本からの展示は実質的にゼロであった。

海外の国際会議での展示はコスト・ベネフィットが低くてペイしない、との声が高い。値段が高すぎて海外では売れない、つまり国際競争力を喪失している、ということ自体が大問題であるが、多岐にわたる日本製品の優秀さをまず理解して貰う必要がある。このままでは2002年のニースでの国際会議の展示会においても、我が国からの展示はゼロの可能性がある。次の機会には、日本支部として展示用ブースを２，３個続きで借り上げ、我が国におけるジオシンセティックス業界の過去・現在・未来と日本支部の主張とを、ポスターやビデオで積極的にアピールすることを提案したい。そしてスペースの許す限り、法人会員各社のパンフレットなどを自由に持ち帰って貰えるようにするとか、会期中は我が支部の会員と他国からの参加者とが気軽に立ち寄って自由に交流できるサロン的な雰囲気を演出するとか、の工夫も凝らしたいものである。

国際的な場においては、機会があるのに主張しないことは、主張すべきものがないからだと思われる。日本を主張し、日本を理解して貰うことが、日本製ジオシンセティックス材料および関連サービスに国際性を持たせるための第一歩になることを、我々はもっと真剣に考えなければならない。